

平成30年度 鹿屋中央高等学校入学試験問題

国語

注意

- 1 監督者の「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙は表紙を入れて七ページです。これとは別に解答用紙が一枚あります。
- 3 受験番号は、解答用紙及び問題用紙の決められた欄に記入しなさい。
- 4 答えは、問題の指示に従って、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 5 監督者の「やめ」の合図ですぐにやめなさい。

受験 番号	
----------	--

1

次の1～3の問いに答えなさい。

1 次の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字は仮名にして書け。

- (1) 優雅な生活。 (2) 土器を陳列する。
 (3) 台風の進路が西に偏る。 (4) この辞典はアツみがある。
 (5) 早起きのシュウカン。 (6) のどがカワク。

2 次の①・②の文を完成させるためには、()のA～Eのうち、最も適当な言葉はどれか。それぞれ記号で答えよ。

- ① 鹿児島馬拉ソンの日は、コース周辺で交通が(A 規制 I 既成
 ウ 奇声 E 帰省) されている。

② 多数派の意見だからといって、すぐに(A 不老不死

- I 風光明媚 U 粉骨碎身 E 付和雷同) するべきではない。

3 次の行書で書かれた漢字を楷書で書くときに、総画数が一つだけ異なるものがある。総画数が異なるもの一つを選び、記号で答えよ。

ア 花 イ 泳 ウ 岩 E 知

2

次の文章を読んで、あとの1～6の問いに答えなさい。

い^アわゆる偉人伝を一冊も読まずに大人になった人はいないだろう、
 と思う。私も、小学生の頃、学校の図書館から手当たりしだいに偉人
 伝を借り出しては、熱中して読んだ覚えがある。書店や図書館を覗^ウく

と、昔と同じような顔ぶれの子供向け偉人伝が何種類も並んでいて、
 いまも昔も、偉人伝が子供のための本の有力な分野となっているこ
 とには変わりがないことがよくわかる。

たしかに、偉人の生涯は感動的で、面白い。そして、親や教師が教
 えることも、模範を示^ツすこともできないような人間のすばらしい生き
 方、行動、ものの考え方を伝えてくれる。幼少^ニのみぎりに偉人伝から
 得た感動や教訓が幾分なりとも残存していれば、大人の世界も少しは
 変わってくるのではなからうかとさえ思えてくる。

a、大半の大人は、偉人伝と聞いても、そんなものは子供の読
 み物にすぎないと一蹴^ハするかもしれない。世のため、人のために尽く
 した偉人の生涯はあまりに無邪気で単純すぎて、大人の世界には通用
 するわけがなく、それよりも立身出世や金儲け^{カネモチ}のハウツー^注を教えてく
 れる物語のほうが大人にとっては面白くてためになるということのよ
 うだ。

とはいえ、そういう大人も、自分の子供には偉人伝を読むことをす
 すめ、そこから何かよいことを読み取ってほしいと思っ^①ているにちが
 い^①ない。大人にはうしろめたさがあるのだ。自分はもはや偉人になれ
 るはずもないし、偉人になりたいとも思わなくなった大人にも、わが
 子には一片の希望を託す^{キモチ}気持^{キモチ}が心の片隅にあるのではなからうか。

たしかに偉人伝は幼少時代の貴重な読書体験ではあるが、しかし、
 私は、これをお子^②だけに独占させておくのは何とももったいない気が
 してならないのである。偉人伝から学ぶべきはむしろ大人のほうでは
 なからうか。子供にとっての模範が大人にとっても模範であつてなせ
 いけないのか。大人のための偉人伝といったものがあつてもいいとい
 うのが、かねてからの私の考えである。海千山千の大人たちも時には
 偉人伝を読んで感動してみるのもいいことではなからうか。

そもそも、偉人^②とは何か。偉人と目されるさまざまな人間の生涯を

調べてみて、偉人の第一条件として浮かびあがってくるのは、人のために奉仕するという献身的行動である。我欲を捨て、他人のために尽くすことを無上の幸福と感ずるところに、私は、偉人の共通点を見つけた。この条件から見ると、いわゆる偉人伝に収められた人物のなかには失格者も少なくないことに気づくはずである。

b、このような献身的行動のもとにあるのは、各人特有の理想である。理想を持たない偉人はない。すべての偉人は理想主義者であり、同時に、実践の人である。偉人が世に知られるのは、その理想のゆえではなく、その実践的行動のゆえである。また、偉人伝に欠かさないのは、人に感動を与えるような生涯の物語であるが、波瀾万丈の生涯のみが人を感動させるわけではない。その生活と行動を通して、人びとに勇氣と元氣、そして希望を与えることこそ、偉人伝のもっとも大きな効能と言っている。そして、分別のある大人なら、偉人の生涯を追体験することによって、多少なりとも敬虔な気分にならざるをえないだろう。

このほかにも「偉人の条件」はいろいろ考えられるであろうが、もうひとつ触れておきたいのは、偉人はその時代や社会のなかで生きた人間だということである。仙人は偉人にはなれない。その時代の緊急を要する難問をみずから引き受けるところから偉人は生れ、偉人の献身的行動は同時代の人びとに理解され、賞讃されることとなる。死後百年たつて発見された偉人などというものはありえない。この点が偉人と天才のちがうところであって、だれも気がつかないことを取りあげてまったく新しいアイデアを生む天才は、いわば時代の外で、というよりも時代を超えて生きている人間であり、その真価が発見されるには数世代あるいは数百年を要することもめずらしくない。これに対して偉人のばあいは時代のなかで役割を果たし終えると、たちまち古めかしい人間になりがちである。大人が偉人伝にあまり興味を示さう

としないのはこのためかもしれない。しかし、私が偉人伝を推奨するもうひとつの大きな理由として、ほとんどの人は天才にはなれないが、しかし、偉人にはなれるかもしれないという希望を持つてもよいということがある。天才のまねごととはどうして不可能であるとしても、偉人のまねごとぐらいはだれにでもできるのではあるまいか。偉人伝を読んで元氣づけられるのも、偉人と共通する何か^③がわれわれのなかにもあることを感じているからではなからうか。そういう楽観的な考えから偉人の生涯を振りかえってみると、大人になったわれわれにも、偉人伝はなかなか面白くて、ためになるものだとということがわかってくるにちがいない。

(木原武一「大人のための偉人伝」による)

(注) 幼少のみぎり＝幼いとき、幼いころ。

ハウツー＝実用的な知識や技術。

敬虔な＝心からうやまい、つつしむ。

1 線部ア、工の単語の中から、品詞が他と異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

2 本文中の **a**・**b** にあてはまる語の組み合わせとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア (a) だから b そのうえ)
イ (a) しかし b ところで)
ウ (a) たとえば b たしかに)
エ (a) つまり b なぜなら)

3 線部①「大人にはうしろめたさがあるのだ」とあるが、なぜ「大人にはうしろめたさがある」のか。六十五字以内で書け。

4 次の文章は、——線部②「偉人とは何か」について筆者が考えることを説明したものである。Ⅰ、Ⅱには二十三文字でそれぞれ本文中から最も適当な言葉を抜き出して書き、また、Ⅲには二十文字以内の言葉を考えて書け。

偉人とは、理想を持ち、かつ、Ⅰと感じ、人のために尽くす人物である。それに加えて、Ⅱという献身的な行動のために、同時代の人びとから賞讃される。偉人はそうした行動を実践する人物であるため、Ⅲ人物として世に広く知られることとなる。

5 ——線部③「そういう楽観的な考え」について説明したものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 偉人のまねごとをして自分との共通点を探し、かつ、天才の行動をまねしていけば、天才になれる可能性もわずかながら生まれるという考え。

イ 偉人のまねごとをすれば、その真価が数世代あるいは数百年の後には認められ、人びとに勇気と元気、そして希望を与えるだろうという考え。

ウ 偉人伝からは、自分に共通する何かを感じることができ、たとえ天才にはなれないとしても、偉人にはなれる可能性があるだろうという考え。

エ 偉人伝を自分と共通することを探しながら読むと、大人のわれわれにも面白いとわかり、ためになるものだと理解できるはずだという考え。

6 次のA、Bの意見を読み、あなたの考えとその理由を書け。ただし、A、Bのどちらの立場に立つかを明確にし、あとの(1)～(3)の条件に従って書くこと。

A 「偉人伝には敬虔な気分を呼び起こしたり、人を元気づけたりする力があるので、天才のアイデアから学ぶよりも、偉人伝を読むことで心を豊かにするとよい。」

B 「天才が生む新しいアイデアは時代を超えてその真価が発見されることもあるので、何か解決すべき問題があるときは、偉人伝よりも天才のアイデアを参考にするとよい。」

条件

- (1) 六行以上八行以下で書くこと。
- (2) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。
- (3) 二つの意見は、A、Bという記号を使って示してもかまわない。

次の文章を読んで、あとの1〜5の問いに答えなさい。

堀川院の御時、勘解由次官明宗とて、いみじき笛吹きありけり。
(注) 注は「ほりかわのむね」(堀川院の御時)、「かかげのすけあきむね」(勘解由次官明宗)とて、(すばらしい笛の奏者)

① ゆゆしき心おくれの人なり。院、笛聞こしめされむとて、召したり
(お聞きになりたいと思つて)

ける時、帝の御前と思ふに、臆して、わななきで、え吹かざりけり。
(氣おくれして) (震えて) (吹くことができなかった)

本意なしとて、相知れりける女房に仰せられて、私に坪の辺りに
(残念に思われて) (よく知っている) (個人的に中庭の辺りに)

に呼びて、吹かせよ。われ、立ち聞かむと仰せありければ、月の夜、

かたらひ契りて、吹かせけり。「女房の聞く」と思ふに、はばかりか
(約束を交わして) (女だけが聞いているのだ)

たなくて思ふさまに吹きける。
(並ぶものがないほど) (みことな音色であった)

帝、感に堪へさせ給はず、「日ごろ、上手とは聞こしめしつれども、
(こらえることがおできにならず) (笛の名人とは聞いていたが)

かくほどまでとは思しめさず。いとど [] めでたけれ」と仰せ出さ
(思わなかった) (より一層) (お言葉を発せ)

れたるに、「さは、帝の聞こしめしけるよ」と、たちまちに臆して、
(さしては) (お聞きになっていたのだ)

さわぎけるほどに、縁より落ちにけり。「安楽塩」といふ異名を付き
(動揺してしまい) (縁側から庭に)

にけり。
(「十訓抄」による)

堀川院 平安時代の天皇(帝)。

勘解由次官 平安時代の官職名。

女房 官中に仕える女性。

1 線部②「思ふに」と——線部④「世にたぐひなく」を現代仮名遣いに直して、すべてひらがなで書け。

2 [] にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア この イこそ ウこと エこれ

3 線部①「ゆゆしき心おくれの人なり」の内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 堀川院は、素晴らしい笛の奏者である勘解由次官明宗が笛を吹く時には邪魔をしないようにとても気がつかっていた。

イ 勘解由次官明宗は素晴らしい笛の奏者で、他の人は明宗が吹く時には気おくれして笛を吹く気にならないほどだった。

ウ 堀川院は音楽を愛する風流な帝だが、外見がいかにめしく、御前に参上した者は気おくれしてうまく演奏できなかった。

エ 勘解由次官明宗は素晴らしい笛の奏者だが、帝の御前では気おくれして演奏ができないような大変気の弱い人だった。

4 線部③「仰せられて」とあるが、堀川院は何とおっしゃったのか。その初めと終わりの三字をそれぞれ本文中から抜き出して書け。

5 次は、本文について話し合っている生徒どうしの会話である。

I [] II [] III []
 I は本文中から十八字の言葉を抜き出し、II・III はそれぞれふさわしい内容を考へて十五字以内の現代語で答えること。

生徒A 「帝ではなく、女房が聞いていると思つたら、I」というのは、明宗の性格がよく出ているね。」

生徒B 「明宗の気持ち、わかるなあ。帝はうまい作戦を考えたと感心したよ。ところで、最後の『安楽塩』とはどういう意味だろう。」

生徒A 「笛の音色に感動した帝がII」ので、明宗はIII」でしょう。つまり、明宗が『あな、落縁』した、というのを、ほとんど同じ発音の楽曲の名前にかけて、あだ名にしたんじゃないかしら。」

次の文章を読んで、あとの1～5の問いに答えなさい。

昭和三十年代、沖縄本島北部の寒村に住む小学四年生の「一平」は、友達「克夫」から子犬を一匹、もらえることになった。

克夫の家は、学校から二キロほど離れていた。本村を通って、山を登り、浜づたいに歩いた後、川を横切ると、克夫の住んでいる村に着く。克夫は、毎日この二キロ余の道を歩いて、学校へやってくるのだ。村には、もちろん克夫だけでなく、同じ学年の智代も一つ上の昭夫もいた。小中学校の生徒たちが合わせて十数名ほど、この村から通っている。

村から学校までの道のりは険しく、人一人がやっと通れるような急な坂道を登ってやってくるのだ。

村の東端を流れる川には、橋は架かっていなかった。本村の東側を流れる川にも、橋は架かっていない。どちらの川を渡るときも、河口の浅瀬を選んで、ズボンの裾を捲って渡るのである。

二つの川は、雨が降ると増水したから、激しい雨の降る日などは、増水する前に生徒たちを家に帰すために、学校が臨時休校になることも度々あった。

一平は、克夫と一緒にその道を歩いた。時には、克夫に手を引かれるようにして、克夫の家にたどりついた。

「よく来てくれたねえ。大変だったでしょう」

克夫のお母さんが、お父さんと一緒に一平を待っていた。一平は、実際、こんなに長い距離を歩くのは初めてだった。

「疲れました」

一平が正直にそう言うと、お父さんとお母さんは顔を見合わせ、声を上げて笑った。

克夫のお母さんが勧めてくれた朱瓜の漬け物は、甘酸っぱい味がした。初めて口にする味だった。一平の顔を見て、二人はまた、笑った。「克夫は、帰ってくるよ、一平君の話だけです」

克夫のお母さんは、終始笑みを浮かべ、柔和な顔をして一平をもて

なした。

たくさんさんの暖かいもてなしを受けながらも、一平の目は始終、庭で戯れている二匹の子犬に注がれていた。一匹は、白い犬で、一匹は茶色だ。どちらも柴犬だ。克夫は、どちらの犬をくれるのだろうか。そのことが気になってしょうがなかった。

二匹ともまるまると太っているが、両手で抱きかかえることが出来るほどに、まだ小さい。克夫が、二匹の犬を撫でながら、抱き上げた。類ざりをしたりしている。

一平は、その仕草を見ながら、克夫は、本当は子犬を自分にくれないのではないかと不安になってきた。早くどちらかの犬を抱いて帰りたい。克夫の気が変わらないようにと、祈るような気持ちで、その仕草を見つめていた。

「克夫、決めたかね？」

お母さんの声に、しゃがんでいた克夫はすぐに立ち上がった。

「決めた」

克夫が、一匹の犬を抱きかかえてそう言った。白い子犬を抱えている。この犬がもらえるんだ。一平は、縁側から飛び降りるようにして克夫の脇へ駆け寄った。

「克夫は、一平君に、犬をあげるって楽しみにしていたのに、いざとなると決めかねてね。昨日から、どっちにしようかかって話ばかり……。まだ、二匹とも名前も付いていないのよ。一平君、可愛がってあげてね」

「はいっ」

一平は、そう返事をして克夫の抱えている白い犬を見た。その犬を手に抱こうとすると、克夫は頭を振ってその犬に頬ずりをして、足元にじゃれている茶色の犬を、一平に示した。

「一平は、あの犬だ」

一瞬戸惑ったが、どちらの犬も可愛かった。間違えた恥ずかしさを隠そうとして、一平はすぐにしゃがんで、茶色の子犬の頭を撫でた。子犬はちぎれそうに尻尾を振った。可愛くてたまらなかつた。

子犬を抱き上げると、克夫と同じように腕に抱えて頬ずりをした。腕

の中に抱くと、むくむくとした可愛い動きと温かい体温が伝わってきた。子犬を抱きながら、嬉しくて、ひとりだけで笑みがこぼれた。早くここから立ち去りたかった。

一平は、克夫と、克夫のお父さんとお母さんに丁寧にお礼を言った。克夫のお父さんは、白い犬は雄犬で、茶色は雌犬だと言った。お母さんからは、お土産に朱瓜の漬け物をもらった。

一平はもう一度、丁寧にお礼を言って、茶色の雌犬を抱いた。そして足早に帰路についた。何度か、後ろを振り返った。克夫の気が変わって、子犬を取り戻しに来るのではないかと気になったからだ。

④村の家々が見えなくなったところで、ホッとため息をついた。そして子犬に何度も頼ずりをした。

「メリ、メリにしよう！」

一平の頭に、突然子犬の名前が浮かんできた。どうして、そういう名前が浮かんできたかは分からない。弾む心のままに、そんな名前が口について出てきていた。早く名前を付けることで、自分の子犬にしたかったのかもしれない。あるいは、異国風の名前を付けることが、子犬を育てるといふ異次元のような体験にふさわしいと思ったのかもしれない。

「メリ、メリ……、メリだ！」

口に出せば出すほど、この犬にふさわしい名前だと思った。

白い砂浜を歩きながら、足裏に感じる砂の感触が、克夫の家に行くときは違うように感じた。一步一步が大人になっていくような奇妙な気分だ。

波が、音を立てながら砂浜に打ち寄せていた。何度も何度も打ち寄せて、白い泡で模様を描いて消えた。⑤その波を動かしているのさえ、一平自身のような気がした。

潮風が、一平の鼻腔をくすぐった。一平は、メリを抱きながら、時折、目を細め、青い海を眺め、青い空を見上げながら、何度も何度も「メリ」と呟いて、また微笑んだ。

（大城貞俊「アトムたちの空」による）

（注）寒村は貧しくさびれた村。

本村は学校から少し離れたところにある集落の名前。

異次元のようなここでは「これまでになかったような」という意味で使われている。

1 線部①における克夫の母の気持ちを説明したものととして、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 初めて家を訪ねてきた息子の友達を優しくねぎらう気持ち。

イ 久しぶりに対面した息子の友達の成長をかみしめる気持ち。

ウ 本村に住む息子の友達が家に来てくれたことに驚く気持ち。

エ 息子に仲の良い友達がいることを心から嬉しく思う気持ち。

2 線部②は、克夫の両親のどのような様子を表しているか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 体が弱い一平を心配して、困惑する様子。

イ 礼儀知らずの一平に驚き、あざ笑う様子。

ウ 正直な一平に好感を持ち、歓迎する様子。

エ 誠実な一平に感心して、一目を置く様子。

3 線部③における克夫の様子を説明したものととして、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア どちらの子犬を一平にあげたらよいか、まだ考えがまとまらないので克夫は困っている。

イ 克夫は一平が白い子犬を欲しがらうという自分の考えに自信を持っている。

ウ 本当はどちらの子犬もあげたくないという気持ちがあふれて克夫はつらくなっている。

エ 克夫はどちらの子犬を一平にあげるか迷っていた気持ちが今ではもうなくなっている。

4 次の文は、線部④の理由を説明したものである。

に四十字以内の言葉を考えて補い、文を完成させよ。

克夫の気が変わるのではないかと不安だったが、から。

5 線部⑤における一平の気持ちを六十文字以内で説明せよ。